

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	梅崎 かほり
主 論 文 題 名 :				
現代ボリビアにおける新しい「ネーション」の生成—アフロ系ボリビア人の事例から—				
(内容の要旨)				
アンデス世界は、インカ帝国を土台としたスペイン植民地時代を経て、20 世紀以降は先住民性にルーツを求める国家形成が模索されてきた地域として知られる。アカデミズムにおいても、常に征服者スペイン人と被征服者インディオのせめぎ合いが焦点とされてきた。このような枠組みの下、ヨーロッパ中心史観が批判され、また人類学や文化史においては、先住民世界とスペイン世界との融合や共存が文化実践においてどのように反映されているかといったことが議論の中心となってきた。このような傾向はボリビア研究においても例外ではなく、1952 年に起きた革命以降のボリビア研究の多くでは、自分たちの価値観の下に国家を統合しようとする「白人のボリビア」と、それに抵抗する「先住民のボリビア」という構図が強調される。2006 年にボリビア史上初の先住民大統領を擁するエボ・モラレス政権が誕生したこともまた、先住民勢力が従来の権力構造を覆したとして、世界の注目を集めることとなった。 しかし、このような二項対立的な捉え方によって、スペイン系・先住民系の人々と共にボリビア社会を形作ってきたもうひとつの社会集団、すなわちアフロ系の人々の存在が見落とされてきたことも事実である。本研究が扱うアフロ系の人々は、植民地時代には奴隷制の下でその人格を否定された存在として、また、独立後の国家形成においてはその存在が忘却され、長らくボリビア社会の周縁に生きることを余儀なくされた集団である。 2009 年の新憲法で「複数ネーションの国 (Estado Plurinacional)」となったボリビアにおいて、ようやくひとつの「ネーション」として先住民と肩を並べた彼らであるが、被征服者としての共通性や混血の歴史を理由に先住民と同じ枠に収めることはあまりに安易である。他方で、アフロ系の人々を「先住民のボリビア」とは無縁の特殊な存在として捉えるならば、彼らの生きてきた歴史、そして彼らを内包するボリビア社会に対する見方は偏ったものとなるであろう。ボリビアにおいてアフロ系の人々は、ときには忘却され、ときには先住民と同一の枠にはめられ、しかしときには自らを固有の集団と自覚させられるような、複雑な集団的アイデンティティを築いてきた人々である。彼らはまた、多文化主義を掲げた「白人のボリビア」が、包摂と排除のからくりで「先住民のボリビア」を統合しようとしていた 90 年代に、いち早くその矛盾に対し声を挙げた存在でもある。				

本研究の目的は、このようなアフロ系ボリビア人の現代史に着目し、彼らが築き上げ表出する集団的アイデンティティの変遷を丁寧に記述することである。これによって、二元的ボリビア観の相対化を試みるとともに、モラレス政権による新しい国家形成のプロセスを、「アフロボリビア」という新しい「ネーション」の視点から捉え直そうとするものである。

本論第一章および第二章では、ボリビアの国民国家形成の過程でアフロ系住民が排除される経緯と、その中で国民文化の一つとして形成された「国民音楽」への異議申し立てを皮切りに都市のアフロ系住民が展開した文化運動の経緯を詳述し、その後の議論の背景としてまとめた。また、この文化運動をボリビアの音楽界がどう受け止めたかを詳細に分析することで、本論の要ともなるアフロボリビアの音文化サヤがボリビア社会に与えたインパクトを明らかにした。

現代ボリビアのアフロ系住民は、スペイン人征服者たちによって強制移住させられた黒人奴隷の子孫である。革命以降のボリビアで、先住民性の再評価によってナショナル・アイデンティティが模索されるなか、植民地時代後期より首都ラパスの北東に広がる溪谷地帯ユンガスに集住していた少数のアフロ系住民は、社会的にも、統計上からも、また文化面においても、主体性を奪われた存在として不可視化されていった。

都市への進出を機に自らの置かれた立場を自覚したアフロ系住民は、ユンガスで継承されてきた独自の音文化サヤを用いて文化運動を展開する。異議申し立てのきっかけは、「われわれの文化サヤ」が、都市で流行する「国民音楽」の中で非アフロ系によって書き換えられ、「サヤ」の名を背負って広まったことであった。1988年、首都ラパス市に住む若手のアフロ系ボリビア人はMOCUSABOL（アフロボリビアのサヤ文化運動）を組織し、サヤの実演を繰り返しながら、マスコミを利用した訂正要求を始める。このサヤ運動は広く注目を集め、アフロ系ボリビア人の存在そのものもまた広く認知されることとなる。このような経緯から、アフロ文化の認知と受容を目的としていた運動はやがて、アフロ系住民の存在そのものが歴史的に周縁化されナショナリズムの中で不可視化されてきたことに対する抗議運動の性格を強めていく。

第三章および第四章では、この文化運動を通してにわかにボリビア社会に浮上した「アフロ系ボリビア人」の集団意識の形成について、彼らの文化運動の要となったサヤを手がかりにその経緯を分析した。第三章では、奴隷解放後も彼らの集住地域となったラパス県ユンガス地方における聞き取り調査と歌詞の分析をもとに、アシエンダ地主や同地域のアイマラ系先住民と共生し、混血を繰り返すなかで内面化された「ユンガスのネグロ（黒人）」としての混淆的な「われわれ」意識を明らかにした。そこでは、村の年長者たちが生きた時代の記憶、つまりアシエンダでの労働の日々や領土紛争の時代を生きた記憶が歌い継がれ共有されていた。守護聖人への信仰心や土地への愛着が織り込まれたサヤの実践を通して、ユンガスという土地に根ざしたアイデンティティが内面化されてきた実態も明らかになった。ユンガスでは、ネグロとアイマラの間でコカ農民としてのアイデンティティが緩やかに共有される一方、聖人祭などの文化実践の場では、サヤが「われわれ」と「他者」との境を明らかにし、同時に「他者」との関係構築の手段として用いら

れてきたこともわかった。このことは、都市のアフロ系住民の復権運動がサヤを通して展開されたことや、後に記憶や土地との結びつきを拠り所とする「ネーション」形成が模索されたことを説明するものである。

第四章では、第二章で扱ったサヤ運動を内側から掘り下げることで、都市のサヤ運動で形成された新たな「われわれ」意識を明らかにした。MOCUSABOL の活動を通して歌われるサヤの歌詞には、黒人奴隷制の歴史、現代のアフロ系住民が対面する差別や不平等の告発、サヤや自文化の称揚が積極的に盛り込まれている。これを繰り返し実践することは、外部社会への異議申し立ての声となっただけでなく、サヤの実践者に自身の歴史認識や、国家および自らが置かれた社会状況に対する問題意識を再確認させ、それを運動の参加者の間で共有させる役割を果たした。このようなサヤの実演と平行して、若い世代の自尊心の育成を意図したワークショップも実施された。1994 年に多文化主義政策をかかげた政府のもと、アフロ系住民はこの運動を通して「ネグロ」という自らの呼称を「アフロ」に改め、「われわれ」の文化の固有性と国民としての権利を主張しながら、「アフロボリビア人」としての連帯感と集団的アイデンティティを確立していった。21 世紀に入り、ボリビアが政治的転換点に向かえるなか、運動はより政治的な意図を含むものへと発展していく。

第五章では、モラレス政権成立から新憲法制定にかけてのボリビアの社会変革のプロセスのなかで、国政の動向を敏感に察知しながら、より強固な「ネーション」としての形を模索していく今日のアフロ系住民の姿を明らかにした。脱植民地化と相互文化的社会の形成を掲げた「複数ネーション国家」という新しい体制のもと、「アフロボリビア人」という一つの「ネーション」として承認されたアフロ系ボリビア人は、国内の大部分を占める先住民と同様に「先住性」を主張することで、新しい国家において揺るぎないアイデンティティの確立を目指し、政治的主体性を主張しはじめる。さらに、国会議員を輩出し、より直接的な政治的発言権を得たことを背景に、2011 年には全国のアフロ系住民を代弁する史上初の統一組織 CONAFRO（アフロボリビア全国審議会）が結成された。

第五章の最後に、都市の運動を中心に政治的に形成されていく「われわれ」意識が具体化するに従い、地域や世代によって「われわれ」意識に齟齬が生まれる様子にも注目した。「われわれ」らしさの画定にあたり露わになったジレンマは、ひとつの「ネーション」としての集団形成の難しさを物語るものでもある。しかしながら、その重層的なアイデンティティを柔軟に解釈することで築かれた国内の先住民組織との連帯が、彼らに「先住性」の主張という着想を与え、今日のモラレス政権下で先住民集団と対等な立場に立つ可能性を開いたことは疑いない。一方で、その間ずっとアフロ系ボリビア人の「われわれ」意識を支えてきた音文化サヤは、彼ら独自の政治手段として鍛え上げられ、集団的アイデンティティの強固な土台となった。このようにして育まれた「アフロボリビア人」だからこそ、政府の掲げる「脱植民地化」と「相互文化性」を体現する新たな「ネーション」となり、21 世紀のボリビアで政治的主体性を獲得し得たのだと言える。